# 平安後期・鎌倉時代物語の多様性

## ――起筆法・冒頭文の展開について（一）

大槻　修

### 序

少年の春は、とうちはじめたるより、ことばづかひなにとなくえんに、いみじく上ずめかしく――[1]

と、無名草子が讃えた「狭衣物語」の巻頭描写が、いかにすぐれた近代的な感覚の上に構築されたものであったか、その詳細は前稿に記した[2]ところであるが、つぎに、「狭衣物語」と並び称せられる作品「夜の寝覚」の起筆法・冒頭文の展開について触れ、ついで「夢の通ひ路」、改作本「夜の寝覚」のそれに関しても考究を加えてみたい。

### 一

人の世のさま〳〵なるを見きゝつもるに、なをねさめの御なからひはかり、あさからぬ契なから、世に心つくしなるためしは、ありかたくも有けるかな[3]

というこの物語「夜の寝覚」の起筆は、それがそのままこの物語の主題の提示でもある。一編の作品の書き起こしが、時代・場所・人物の説明をあとまわしにして、ある情景描写のなかに、主人公の心情をはめ込んでゆくモダーンな技法を駆使した「狭衣物語」と比較して、物語「夜の寝覚」は、新しい一つの技法、つまり全巻の主題をその冒頭部分で提示するという、革新的な発想を成し得た点、両物語が平安後期物語の代表的な作品であってみればこそ、なおのこと注目される現象であろう。

寝覚こそとりたててていみじきふしもなく、また、さしてめでたしといふべきところなけれども、はじめよりただ人ひとりのことにて、ちる心もなく、しめじめとあはれに心入りてつくり出でけむ

ほど思ひやられて、あはれにありがたきものにてはべれ

という無名草子評言は、現存本「夜の寝覚」にみられる中間欠巻部、末尾欠巻部が存在していた頃の、つまり全巻揃っていた原作を読んでの全体評であるが、そこには「狭衣物語」など他の物語とは趣を異にする、むしろ自己凝視の日記文学と視座を近似する特異な作品として位置づける立場が、よく表出されているといえるであろう。朗々と声あげて読む華やかな文体と展開を持つ「狭衣物語」に比して、これは一室にて静かに黙読するにゆかしい地味な文体と展開を有するが、作者のねらいは、最後まで一貫して、女主人公の宿命の辛さを描くことを中心に据えて、「女の一生」「女の業」というものを凝視しながら、筆を進めていったとみてよいのではなかろうか。(4)

すなわちこの物語は、「思うにまかせぬ悲恋」の物語であり、また天人の、中の君（寝覚の上）に対する予言

あはれ、あたら人の、いたくものを思ひ、心を乱し給へきすく世のおはするかな

によって、この作品が、宿命に翻弄される女主人公の苦悩の人生を描くことを知るであろう。

考えてみれば、物語類の通例は、男主人公の両親の紹介から始めるのが一般であった。(5)「源氏物語」はいうに及ばず、「狭衣物語」の場合もまた

この頃、堀川の大殿と聞えさせて、関白し給ふは、一條の院・当帝などの、一つ后腹の五の御子ぞかし。

と、その通例は守られてきた。既に説かれる通り、(6)「源氏物語」における光源氏はともかくとして、宇治十帖における浮舟、「狭衣物語」における飛鳥井の姫君など、徐々に物語主人公の座は、男性から女性に転換される傾向にあったが、物語「夜の寝覚」は実に女主人公関係を先にするという一つの型を提示した。

そのもとのねさしをたつぬれは、そのころ太政大臣ときこゆるは、朱雀院の御はらからの、源氏に成給へりしになむありけり

に始まる実質的な展開の部分は、女主人公「寝覚の上」の両親の具体的な説明から導入されてゆく。そこには既に、ひたすら「女の宿命」を追求しようとする作者の姿勢がほのみえているといえよう。

## 二

いま、一つの大作を書くに当って、最後まで一貫して女主人公の宿命の辛さを描くに際し、物語の書き起こしを、その物語の主題提示でスタートさせる場合、作者はその全体的構想に、どの程度の準備をしたものであろうか。いま、その主題は異にするとしても、島崎藤村が不朽の名作「夜明け前」を書くに際して、かの詳細かつ膨

大な大黒屋日記の抄録ノートを作製して、その綿密な構想と準備のもとに筆を進めていったことは衆知の事実である。もっとも抄録ノートは藤村によって原資料から選ばれた部分であり、一応は藤村なりに整理されたものであって、大黒屋日記抄と大作「夜明け前」とを短絡させる危険性は、十分認識する必要はあろうが、やはり大黒屋日記の存在が「夜明け前」の成立に、非常な役割を果たしたことは皆人の否定し得ぬところであろう。

一大長編小説を書きおろすに際して、作家の姿勢には、その人柄、性格を含めて種々のケースが考えられよう。ある人は全巻の系図的関係、風土的背景その他諸条件に対する綿密な資料を整理して、水も漏らさぬ準備のもとに、一貫した主題を息長く滔々と流し切るであろう。またある人は、一応のワク付けの下に構想を練り、然るべき時点までの展開を、その主題のもとに執筆しながらも、雲のごとく湧き出る感情は、当初の意図的態度に微妙な変質を与えつつ、換言すれば、一つの主題のもとに構想された作品ではあるが、長編なるが故に、その主題の発展と完結とのかかわり合いに微妙なズレを来たすことも、結果として生じてしまうことであろう。

物語「夜の寝覚」の場合、その起筆部分がそのままこの物語の主題の提示であり、かつ中の君（寝覚の上）の夢に現れた天人の予言がまず設定されるだけに、当初の書き出しと現存全五巻（前田家本三巻）の内的構想の発展とのかかわり合いに微妙な問題を提起することになる。

いうまでもなくこの物語は、つぎの四部構造においてとらえるのが一般である。すなわち第一部―巻一・二（前田本上巻）、第二部―中間欠巻部、第三部―巻三・四・五（前田本中・下巻）、第四部―末尾欠巻部。物語の冒頭書き起こしと、中の君への予言に照応する現存最後の巻五椿尾「夜の寝覚絶ゆるよなくとぞ」の一節は、主題の完結・発展の問題に深くかかわりを持ち、ひいては「夜の寝覚」四部構造の把握の上で見解の分かれるところである。(7) つまり第三部をもって本物語の主題は完結し、第四部は読者奉仕の精神によって書き継がれた「続編」とみる立場と、第三部から第四部へと、さらに主題の発展を期待する見解とである。確かに第四部に相当する原作が出現しない限り、断定的な発言は困難ではあろうが、現存諸資料を併わせ想定した限りでは、それは物語の最後まで、寝覚の上の一生を「女の業」の辛さとして、執拗に描き切った点に作品の特徴が読み取られ得るように考えられる。

それはともかく、中間、末尾欠巻部分がもし失われなかったとして、全二十巻は存在したかと覚しき長編「夜の寝覚」の書き起こしを、いわば大胆にも、そのまま物語の主題の提示で始めたことは、これから書く全編の思潮をすでにワク付けることであり、作者の胸

の内には、それなりに十二分の構想と準備は成されていたと思われる。「狭衣物語」と異なった「夜の寝覚」の起筆は、ここに改めてその意図的発想を称揚されるべきであろう。

## 三

「狭衣物語」の場合と同じく、物語「夜の寝覚」の画期的な書き起こしは、後代の作者たちによって継承されない筈はなかった。

全巻を人生無常の思想で貫き、それに利生説話、継子説話、恋愛談を配して一編が出来ていると考えられる物語「苔の衣」の書き起こしは、

あふてのこひもあはぬなげきも人の世にはさま〳〵おほかなる中にこけのころもの御なからひはかりあかぬわかれまてためしなくあはれなることはなかりけり(8)

と、完全なる「夜の寝覚」の踏襲であった。前半の女主人公である大将北の方のはかない生涯、将来は関白にまで昇るべき大将が一生を捨てて僧衣（苔の衣）をまとう。後半の主人公たる兵部卿宮もまた大将入道の姫君との恋を得ず、すべては悲観的、厭世的な筆致のなかに三代の人生のはかなさを描いた長編の書き起こしとして、「苔の衣」作者は、名作「夜の寝覚」の冒頭に深い感慨と共感の念を持っていたのであろう。

また、無名草子が「今の世の物語」として掲げた四編の物語のうち、その筆頭に位する名作「在明の別」(9)にも、その影響がみられる一節を取り出し得よう。物語の主人公たる男装の姫君（右大将）は、叔父にあたる左大将の邸にしのび込む。それは正月のある雨の夜、女大将は隠れ蓑に身をつつんでかいま見たものは、叔父左大将と今北の方の連れ子である姫君（対の上）との道ならぬ恋の現場であった。半ば脅迫気味に姫君を口説く左大将の醜い姿に絶望する女大将の歎きは、つぎの言葉に集約されている。

かくてあかさんもよしなければ、やをらたちいづるみちすがら、人のよのさま〳〵なるをみきくにつけても、めづらかなる御みのありさまあはれにおほしつゝけられて

これは「苔の衣」冒頭ほど、あからさまな引用態度ではないにしても、「夜の寝覚」書き起こしの巧みな引用と覚しく、「竹取」「宇津保」「源氏」「狭衣」など正統派物語の系譜に立ちながら、「隠れ蓑」「古とりかへばや」の特異な趣向を摂り入れた佳作「在明の別」作者は、「夜の寝覚」に対する関心もまた並々でないものがあったと考えられよう。

ともあれ、狭衣物語と並び称せられる「夜の寝覚」もまた、「狭衣物語」と全然観点を異にする書き起こしのもとに一大長編物語を完

成すると同時に、その冒頭は後代の物語作者をして魅了させずにはおかなかったのである。

## 四

一条権大納言と梅壺女御との愛の宿縁を語る「夢の通ひ路」は、現存擬古物語中の最長編と目されるが、近時、工藤進思郎氏ら四氏編になる「夢の通ひ路物語」[10]が刊行され、研究の便が、より一層図られたことは学界のために慶賀にたえない。

この物語は帝二代にわたり、ほぼ十八年間の出来事を描いていると考えられているが、巻二と巻三との間に、更に長い年月の経過を想定すべきであろうとして、巻一から巻六まで二十七年間にわたる展開を考慮される木村公子氏の研究[11]もあり、なお検討を要する命題であろうが、本稿の論旨の都合上いまは触れない。

実はこの物語の巻一冒頭に、序に当る部分があり、吉野の古き帝の御陵に仕える聖が、夢の中で、近頃亡くなった一条権大納言から巻物を託される記述がある。

ある夕暮に、よにむかしのおや〳〵のめぐみふかゝりし事どもおもへば、このごろうせ給ひし権大納言の御事のいたわしかりし御有様、残とゞまり給ひ、なげきおぼすらんほどなんどおもひつゝ、しばしまどろみしに、あてやかなる直衣すがたにて、権大納言立給ひて、御手にぢく・ひやうししたる巻物をもたせたまゐて、「御僧に、はづかしながら此もたるもの見せ奉らん。ゆめ〳〵うたがわせ給ふな。さることどもはべりけり。此ごろ、三の宮、よに御おぼへふかきにも、我まよひなんはれがたければ、是をしのびて見せ奉らせたまへ。かつ御ため、又ふかくまようすじのあきらめにもはべれば、こと人には、ゆめばかりももらさせ給ふな。むつましきかぎりあまたさぶらふさまなれど、君ならでは聞えうけたまはるべきかた、はたおもほへさぶらはねば、かふ見せ奉る。さるゑんに御手向をうけまほしけれ」とて、かの巻ものをたまふと見て、ゆめさめぬ。いぶかしくおもひて、一間に入てひらき見れば、こと葉もつゞけず、女の手して、そこはかなきすさみなりけり。[12]

以後、物語の詳細な展開は前掲の工藤氏らの著書に記された梗概または同じく前に紹介した木村氏の年立に依られたいが、序のこの部分に呼応する場面が巻六に用意されている。

よみおわりつゝ、誠にいたわしき御事かなと、すくすくしきひぢり心にもとよなくかゝりて、巻かへしつゝ打見れば、かの御手にて、さゝやかなるかみに、もんじもきへ〳〵に、

哀しれまよふうつゝのうきことにいかでさまさん夢のかよひ路

すなわち、序の末尾で夢から覚めた聖が巻物を開き、読み始めて、以下につづく長い物語は、すべてこの巻物の内に書いてあったものとする。つまり物語の大部分は、夢中に託された巻物を、聖が読み進める、という構想のもとに作品が描かれている。かかる点、まことに首尾照応した構成として注目に価する佳作というべきであろう。蓬左文庫本巻五の末尾に、本文とは別筆で

此六帖のものがたりわ、その作者をしらざれども、源氏・狭衣などの心ばへにて、つれ〴〵の筆のすさびに書ながしけむ、情ふかくみゆ

と評されたこの物語は、風葉和歌集にその名をとどめる「夢のかよひぢ」とは別個の作品ではあろうが、「狭衣物語」にみられる起筆・冒頭文のあり方と異なり、またその構成は、「夜の寝覚」とは逆った首尾照応を成し、その末尾部分に本物語の題号に触れる主題歌を配するなど、かかる形態の作品は珍しく、併せて注目されるべきものであろう。

## 五

全六巻、延々と巻物を読み終った聖が、それを三の宮に手わたす。始め序に託された極大納言の願いが、ここにかなえられたとする「夢の通ひ路」の特異な構成を模した作品は容易に見当らない。いま、それに準じた型として、改作本「夜の寝覚」（中村本）の場合を考えてみよう。

しとうの露のそこの花のいろおとろへ、すいちくのけぶりのうちにとりのこゑもまれになりゆけば、春のなごりいまはかぎりにやと、ながめぬ人なきゆふべ、すき〴〵しき人々、ひんがし山のほとりにおかしきすまひあるにあつまりて、れんが・わがのくわいは中〳〵なりとて、ふるき物がたりやさうしのなかにおぼつかなき事どもをいひあわせつゝ、たがひにかすみともれる心の中をはるけゝるに[13]

で始まる書き起こしは、原作「夜の寝覚」と異なって、和漢朗詠集上、春、藤の

紫藤露底残花色　翠竹烟中暮鳥声

を踏まえ、一見、狭衣物語の起筆による

少年の春は惜しめども留まらぬものなりければ、弥生の二十日余にもなりぬ

の、豪華絢爛たる寄せ木細工式の美文調を想起させられる。ただし、以下、その話題が「夢」の叶うことに及んで、

中におとなしき人、よろづしりがほにして、「はかなき夢とは、いかにものし給ふか。「ゆめとしぢにつうず」と申こと、ほんも

んに見えたり。されば、雨のよのねざめがちにて、ねやのうちしづかならぬには、そゞろなる夢もみる。これを「こひ」と申なり。そらはれ月あきらかなるおり、あざやかなることを見るを、「じちん」と申て、これはとくおそき事こそあれ、かならずむなしからずとぞ、うけ給はりをきたる。ふるき人のかたり侍しは、

と「物語」を展開させた後、その締めくくりには

かやうに夢はむなしからぬ事と、ありがたくぞ侍しとぞ

と、「結び」の一節を用意している。すなわち序と擬筆部との相呼応した構成は成立年時の前後はともかくとして、「夢の通ひ路」にみられる序と擬筆部（但し、改作本「夜の寝覚」の場合は文字通り擬筆部であるが、「夢の通ひ路」の場合は、末巻部の終り近い部分であり、若干の相違はあるが）との照応と相通じたものがあるであろう。改作本「夜の寝覚」の場合は、現実に、「ふるき人」が語り始める、という形態をとるに対して、「夢の通ひ路」の場合は、聖が「夢」の中で、近ごろ亡くなった一条大納言から巻物を託され、それを読み進めるという形態をとる。加えて、巻物を読み終えた吉野の阿闍梨が、それを巻き返していると、まごうことなき権大納言の筆蹟で、

あはれ知れまよふうつつの憂きことにいかで覚まさん夢の通ひ路

と書かれた紙片が舞い落ちる、といった構成など、ある意味では改作本「夜の寝覚」を上回って、一味ちがう作者のテクニックの程を感ぜしめるものがあろう。

## 六

ともあれ、序と擬筆部の相呼応した構成は、大鏡以下四鏡の形式としては知られており[14]、中世には、実際の法談、説教の場にも関係して一般化したことではあろうが、宮廷女流文学の系譜を辿る「姫と貴公子とのラヴ・ロマンス」を題材に展開する物語作品のなかで、「夢の通ひ路」、改作本「夜の寝覚」の構成は注目すべきものがあろう。なお序と擬筆部の相呼応した形式ではないが、「風につれなき」の書き起としもまた改作本「夜の寝覚」型に準じていよう。

「苔の衣」とほぼ同じ構想のもとに執筆され、恋および人生の無常を表出した「風につれなき」は、現在、現存は一巻の残闕にすぎず、いまその全貌を読み得ない。従って末尾擬筆部との照応を確認できないことは残念であるが、ともあれ書き起としは、

ことの葉しげきくれたけの、よゝのふるごとゝなりぬれば、なにのをかしきふしとて、すぐれたるきゝ所なけれど、おのづから心にとまりたるすぢ〳〵を思いでつつ、秋のあけがたきおいのねざめのつれ〳〵なるまゝに、こゝろをやりたりしとはずがたりをか

きあつめて、とまらむあとのあやしけれど、[15]

と、「老いの寝覚のつれづれに、問わず語りをする」形式のもとに、

世をまつりごちたまひし大臣の御子、をとこ・女あまたおはしき。たろうは、いまの関白、左大臣ときこゆ。

と物語の実質的展開に導入されてゆく。大鏡における大宅世継百五十歳、夏山繁樹百四十歳。今鏡における老女百五十余歳、増鏡における老尼百余歳といった、不自然な高齢者を話者に加えたり、水鏡における他人の登場といった不自然な仮託を排して、一つは「夢の通ひ路」にみられるロマンチックな構想、一つは「風につれなき」、改作本「夜の寝覚」にみられる自然な「語り」への導入など、また序と擱筆部との照応という構成をも併せて、そこには、「狭衣物語」や原作「夜の寝覚」の起筆・冒頭の展開とまた異なった作者の智恵を発見するのである。

## 結　語

ふりかえるに、「竹取物語」から「源氏物語」に至る間、これまでの物語書き起こしの常識であった時・所・人の説明から導入する素朴な手法は、平安後期の物語から、以後、鎌倉、室町初期へと、時代が移行するに従って、実に多岐にわたる精彩な発展を遂げたといえるであろう。「狭衣物語」を始めとする、例の美的な叙景抒情文で始める手法が、大きく往時の物語作家の心を掴え、華麗な書き起こし、冒頭の展開を促進したが、また、しみじみと女の一生を凝視し続けた「夜の寝覚」の起筆法、その作品の主題をその冒頭に提示するという斬新な筆法も、後代の作家の倣うところとなった。かと思えば、夢の中で巻物を托された聖が、それを開き読み続けるという、まこと夢のようなロマンチックな手法で、かつその結末には、夢中に現われ、その巻物を托した権大納言の直筆による主題歌の紙片を舞い落させるという劇的なラスト・シーンを設定した「夢の通ひ路」の作者の非凡な構成力。加えて、鏡物にみられる不自然な高齢者とか法話臭を脱して、素直に「語り」に移行させた改作本「夜の寝覚」や「風につれなき」の作者たち―。

いま本稿のテーマである「起筆法・冒頭文の展開について」限ってみても、平安後期・鎌倉時代物語の作者たちが、いかに従来の名作・佳作を自己の中に取り込むと同時に、新規な発想のもとに、巧みな構成力を発揮していったか、改めてここにその事実を強く認識すべきであろうと思うのである。

（昭和五一・一〇・一記）

注(1)　鈴木弘道氏「校注無名草子」（昭和五一年四月、笠間書院）。以下、無名草子の引用本文は本書に依る。

(2) 拙稿「平安後期・鎌倉時代物語の多様性、—起筆法・冒頭文の展開について(一)」(明石短期大学研究紀要、第6号、昭和五一年九月刊)

(3) 大槻修・節子校注「夜の寝覚　一」(昭和五一年四月、新典社)

(4) 注(3)の解説を参照。

(5) 鈴木一雄氏も、校注・訳「夜の寝覚」(日本古典文学全集、昭和四九年一〇月、小学館)のなかで、そのことに触れておられる。

(6) 三谷栄一氏「物語文学史論」(昭和二十八年一一月、有精堂)参照。

(7) 注(3)の解説。永井和子氏「ねざめの構造」(平安文学研究、25輯、昭和三五年一一月)、野口元大氏「夜の寝覚の主題と構造」(文学、昭和四二年四—五月)、阪倉篤義氏「夜の寝覚と夜半の寝覚」(国語国文、昭和三九年一〇月)など参照。

(8) 前田本「こけ衣」(昭和一四年二月刊、尊経閣叢刊)の本文による。

(9) 拙著「在明の別の研究」(昭和四四年一〇月、桜楓社)および改訂版「在明の別」(昭和四五年六月、同)参照。以下、「在明の別」の本文等は本書に依る。

(10) 工藤進思郎氏ら四氏編「夢の通ひ路物語」(昭和五〇年三月、福武書店)

(11) 木村公子氏「夢の通ひ路物語の年立と脱落に関して」(名古屋大学国語国文学、三十八、昭和五一年六月)

(12) 以下、「夢の通ひ路」の本文は注(10)に依る。

(13) 金子武雄氏「物語文学の研究」(昭和四九年四月、笠間書院)の本文に依る。

(14) 永井和子氏「寝覚物語の研究」(昭和四三年七月、笠間書院)

(15) 丹鶴叢書「風公津連奈良物語」上(大阪府立図書館蔵)の本文に依る。